道においても、やゝ此論なきにあらず、さかも越列機のちからは、地震によつて障碍を受る事は、既に世人の知る所なり、

地震前兆を知るの法、童蒙のため圖にあらはして、その指南を譯す、左の如し、○圖略

圖のごとく磁石を紐にてむすび、天井あるひはかもゐなどより釣さげ、その磁石へ鐵の釘のるいを親和させ置、その眞下へ銅だらいの類なににても、釘のおつる時、その音ひゞく品をするゑ置べし、地震これなき時は、附著ありて落るといふことなし、まさに地震あらんとするときは、磁石黑鐵に親和の利用を失ふがゆゑに、鐵釘忽ち承器に落下して、その兆を人耳に益す、これ地震前知の一良法とす、圖をみてよろしく察解すべし云々、　鷹築逸民誌

〔春記〕長久元年○長暦四年十一月一日壬子、早旦參內、依去夜地震事也、○中略前日天文奏云、及冬有地震歟、其事果然、

〔玉海〕元暦二年○文治元年七月十五日丙申、天陰、同暮日、諺云、今日又可有大震云々、然而余○藤原兼實不信受之、午刻向堂爲念誦也、

〔鎌倉洞山地震記事大日本地震史料所載〕越後今町、三月廿四日、海上鳴る事夥しく、高田城下へ聞えたり、海の鳴ること折節はある事なれども、此度例ならず夥しかりしかば、何か變事あらんかと恐れしが、果して夜中大地震あり、

〔時風錄〕十月二日夜四時大地震、其上所々出火、

安政二年十月二日の大地震は、昇平の世の大變なり、よりてこゝに其あらましをしるし置ぬ、今を去ること百五十三年、元祿十六年十一月廿二日夜、江戸、小田原大地震、其頃天野彌五右衞門といへる老人の曰、星ひきく見へ、冬温かなる年は、地震あるものぞとて、家にかすがひうち、繩がらげなどして置けるに、果して其大地震ありしとぞ、こゝに思ひあたれることあれ、頃年冬暖か